つぶやき113

博多とアジアの映画(103)

松浦　仁

1983（昭和58）年、前年に日本でも大ヒットした「少林寺」（1982）

福岡市内の7つの映画館で上映され、さらに70年代に製作された〈少林寺〉がタイトルに入った〈少林寺〉を舞台に〈少林寺拳法〉を題材にした3本の映画が上映された。そのうちの1本がジャッキー・チェン主演の「少林寺木人拳」（1976）だったのだが、ジャッキー・チェン主演のカンフー・アクション映画は他にも上映されていた。

この年が日本（福岡市）初公開だったのが「蛇鶴八拳」（1977）だった。羅維影業公司（ロー・ウェイプロダクション）が「少林寺木人拳」の次に製作したジャッキー・チェン主演カンフー映画だった。『少林寺八流派の長老8人が、蛇鶴八拳という新拳法を編み出し秘術書にまとめるが、8人の長老のうち7人が黒頭巾で顔を覆った者に毒殺され、残った長老はひとり犯人を探す。時はながれたある日、長老は酒場の諍いに巻き込まれ、徐英風（ジャッキ・チェン）という若者に助けられる。長老は徐英風に蛇鶴八拳を教え、偽の秘術書を持たせて犯人探しを託す。』『少林寺木人拳』と同じ敵役カム・コンとの対決は初期のジャッキー・チェン主演作屈指の激闘で、全体的に重厚な展開に仕上がっている。香港で1978（昭和53）年に公開され、日本では1983（昭和58）年2月19日に東映が輸入・配給して東京で初公開された。福岡市では2月25日から3月18日まで東映グランドで上映された。「龍の忍者」（1982）との併映だった。

「龍の忍者」は、思遠影業公司（シーゾナル・フィルム）が1982年に製作した香港映画で、原題は「龍之忍者」だった。主演は真田広之で、日本映画界で数々のアクション時代劇に主演していた真田広之の海外進出第1作目だった。『父の仇を追って中国へ渡った青年忍者・玄武（真田広之）が、父の仇を慕う孫靖（コナン・リー）という若者と死闘を繰り広げ、やがて本当の大きな悪に対峙する。』日本では東映が輸入・配給して2月19日に東京で「蛇鶴八拳」とともに初公開された後、全国の東映系の映画館で公開された。福岡市では東映グランドで上映された後、筑紫東映でも3月25日から3月12日まで上映された。

「蛇鶴八拳」は、二日市シネマで5月29日から6月6日まで「悪漢探偵」（1982）との2本立てで上映された。「悪漢探偵」は、1980（昭和55）年に設立された新興の映画製作会社、新藝城電影公司（シネマ・シティ）が製作した香港映画だった。「Mr.Boo!」シリーズのサミュエル・ホイが主演した痛快娯楽映画で、シリーズ化された5作の1作目だった。（本誌、「博多とアジアの映画（101）参照）

さらに、羅維影業公司（ロー・ウェイプロダクション）がジャッキー・チェン主演で製作した「カンニング・モンキー天中拳」（1978）も公開された。ジャッキー・チェンは1976（昭和51）年に羅維影業公司（ロー・ウェイプロダクション）に入社して、「少林寺大木拳」「成龍拳」「蛇鶴八拳」「拳精」などに主演するのだがいずれもヒットしなかった。ロー・ウェイからポスト・ブルース・リー〉と期待されていたジャッキー・チェンだったが、ブルース・リーの鬼気迫る重厚なイメージと自身の持ち味が異なっていると感じていた。ジャッキー・チェンは、ブルース・リーのカンフー映画路線とは異なる新しいカンフー映画を若いスタッフたちとともに完成させたのが「カンニング・モンキー天中拳」だった。

『その日暮らしをしている宿なしの青年・コウ（江濤（ゴン・トゥー）、ジャッキー・チェン）は、拳法家にあこがれていた。コウは死んだ賞金稼ぎになりすましたことから、秘薬をめぐる悪党の争いに巻き込まれ命を狙われるが、武術の達人マオ大人（リー・マンチン）

があらわれて救われる。そして、一門の奥義を絵付きで書いた虎の巻の紙片〈カンニングペーパー〉を一枚ずつ受け取り、〈カンニングペーパー〉に従って独学で武術の型を一つずつ習得していく。』

ブルース・リーのカンフー映画との差別化を図り、独自のカンフー映画を模索していたジャッキー・チェンがたどり着いたのが、「蛇鶴八拳」「拳精」などのシリアスで陰鬱でさえある重たいカンフー映画ではなく、ブルース・リーに勝るとも劣らない壮絶な格闘シーンにコメディやユーモアの要素を取り込むことだった。そして、「カンニング・モンキー天中拳」では既存の作品を引用して可笑しく見せるパロディの手法が用いられた。

オープニングのタイトルバックには、主人公がカンフーの大家になる夢の中から勝新太郎そっくりの座頭市が登場し、さらにカンフーや少林寺拳をパロディにしたショートコントが続く。また、劇中の夢想シーンでは主人公が道端に生えた草を食べると力がみなぎり、「ポパイ」のテーマ曲が流れる。悪党一味の応戦シーンには、ブルース・リーのヌンチャクも出てきて、とにかくパロディを多用して観客を楽しませようとする度が過ぎるほどの意図で満載だった。そして、武術の心得のない主人公が武術の技法を説明した虎の巻のような無数の紙片をカンニングして見様見真似で武術を習得していき、最後に敵を倒す、コミカルな要素を盛り込んだ鮮やかな技の数々はジャッキー・チェンの真骨頂だった。ジャッキー・チェンのカンフー映画は、この映画を機にユーモアにあふれたカンフー・コミカル映画という独自の路線に進むことになる。

ところが、ジャッキー・チェンをシリアス路線で売り出そうとするプロデューサーのロー・ウェイは、コメディ要素の強いこの映画を気に入らず、1978（昭和53）年に製作されたものの公開しなかった。ほどなくして、ジャッキー・チェン主演作「スネ・キーモンキー蛇拳」（1978）「ドランクモンキー酔拳」（1978）「クレージーモンキー笑拳」（1979）がヒットし、ジャッキー・チェンが世界的なスターになったことで、「カンニング・モンキー天中拳」は1980（昭和55）年になってようやく香港で公開された。日本での公開はさらに遅れて1983（昭和58）年に東映が輸入・配給して8月6日から全国公開された。福岡市では福岡東映で8月6日から9月9日まで上映された。

ところで、「カンニング・モンキー天中拳」の原題は「一招半式闖江湖」、英題は「Harf a Loaf of Kung-Fu」で邦題とはまったく異なっていた。「一招半式闖江湖」は、〈江湖を渡り歩く半人前男〉、ストーリーに順じて意訳すると〈半人前の青年、カンフーで大活躍！〉といった意味になるらしい。「Harf a Loaf of Kung-Fu」の〈Harf a Loaf〉は半分のパン、期待の半分という意味で英題は〈半人前のカンフー〉みたいな意味のようだ。輸入した東映は、この映画を原題にとらわれずに、ヒットした「スネーキーモンキー蛇拳」「ドランクモンキー酔拳」「クレージーモンキー笑拳」のジャッキー・チェン〈拳〉3部作のタイトルに合わせて、4部作のひとつとして宣伝したかったのだろう。武術の心得のない主人公が秘伝の武術を記した虎の巻の紙片を見ながらカンニングして敵を倒すのだが、〈スネーク×ドランク×クレージー〉の前3作における特異な武術に相当する・・モンキーが〈カンニング〉だったので、まず〈カンニング・モンキー〉というタイトルが付けられたのだろう。そして、〈蛇拳×酔拳〉〈笑拳〉に相当する拳法の名を〈天中拳〉としたのだが、武術の達人マオ大人が主人公の青年コウに渡す〈カンニングペーパー〉の武術が〈天中拳〉であるとは書いていないし、言ってもいない。マオ大人がコウにむかって「烏龍大狭」と言う場面がある。〈烏龍〉は中国語の俗語で〈どじ、愚か者〉のことで、〈烏龍大狭〉は間抜けなヒーローといった意味になる。韓国ではこの「烏龍大狭」をタイトルにしているのだが、日本人は〈烏龍〉といえば烏龍茶を連想するし、東映はもっとインパクトのあるタイトルにしたかったのだろう。次号に続く

＝図版は、「龍の忍者」＝